

地域事業計画の実施成果報告

法人名等	社会福祉法人砂原母の会
施設名	幼保連携型認定こども園そあ
報告書（役職）	辻 美南子
住所・連絡先	東京都葛飾区水元 3-13-20
	電話 03-5660-2415
	E-mail info@sower.ed.jp

○タイトル（新規事業計画）

園と縁をつないで、架け橋を作る

○主な助成備品

スマートフォン、PC

1. 保育計画（新規事業計画）策定の目的

現代社会は少子高齢化、核家族化、貧困の連鎖、騒音問題といった複雑に絡み合う社会問題に直面しており、コロナ禍はこれらの問題をさらに深刻化させた。デジタル技術の進歩は生活の利便性を高めた一方で、人とひととの直接的な繋がりを希薄化し、孤立感を抱える家庭が増加しているという現状がある。

このような断絶された地域社会において、私たちは「赤ちゃんからお年寄りまでほっとできる地域づくり」を法人のビジョンとして掲げ、本園が人とひとをつなぐ「地域の中のはしわたし」の役割を担い、支援を行っていかうと考え、事業を行っている。

地域に住む多くの子育て世代は、子育てについてどこに相談すれば良いのか、どのような支援制度があるのかを知らず、不安や悩みを抱えながらも誰にも相談できず孤立している方もいる現状がある。経済的な理由、子どもの特性、育児への自信の無さなど、様々な要因が重なり、相談すること自体が難しい、また困っていることに気づいていない親もいる。これらの子育て世代に SNS を通じてあらゆる情報を発信することで、すなわち直接様々な情報が手元に届くことで、これまで「助けて」と言えなかった人たちの声を聴くことにつながると考える。

子育て広場を利用する保護者の背景は多種多様だ。SNS ではなく直接園に来て誰かと話をすることでホッとできる保護者もいる。そういった方に私たち自身が何かの助けになりたいと考えた。だがこちらの想いを伝えれば伝えるほど、保護者は広場に行きづらくなってしまうこともよくあった。そのため、まずは保護者自身が広場に気軽に來ることができるきっかけづくりとして、広場図書館を設けた。そういった絵本の貸し借りのスモールステップの中で、子育て広場に足を運びやすくすることを目的とする。

2. 具体的な実施内容

地域支援事業として「そあ・子どもコミュニティセンター」という子育て広場を行っている。土日祝日を除いた週5日間、9:00～12:30、13:30～15:30の時間帯で、近隣地域に住む0～2歳児の親子を対象に開所し、以下の事業を実施している。

- ①子育て広場に関する情報をスマートフォンやPCを使いInstagramや公式LINEを用いて、地域に住む親子へ発信し、親子が安心して遊べる場を作る
- ②スマートフォンやPCを使って、地域の親子が利用できる広場図書館の設置

3. その成果と評価

- ① Instagramでイベントカレンダー、予定する講座の宣伝、実施した講座の内容、日々の園児の様子などの発信



<成果・評価>

こども園そあのInstagramでは、従来職員に限られた台数のスマートフォンで、撮影・編集・投稿という一連の作業を行う必要があった。しかし、職員用スマートフォンを各保育教諭に配布し、活用することによって、イベント講座や日常の何気ない園児らの様子を気軽に撮影できるようになり、より多くの情報を発信することが可能になった。そういった取り組みの結果、4～6月の子育て広場には88名の参加があり、多数の講座の中で「Instagramを見て参加した」といった新規の利用者も見られるようになった。情報の発信が、親子の子育て広場への参加を促す要因の一つになり、子育て支援に一定の成果を挙げることができたのだ。

- ② 事業を行う中で見えてきた地域に住む親子の実態

私たちは、子育て支援の一環として、園の近くの公園で、公園保育の実施を計画した。しかし、実際にいくつかの公園に足を運んでみると、そこに地域の親子の姿はあまり見

られなかった。そこで、公園保育を効果的に実施するためにも、地域の親子が普段どこに足を運び、どこで過ごしているのかを調査することにした。

◎街頭インタビュー（一部抜粋）

日付	出会った場所	対象	聞いたこと
9/3	水元公園	金町周辺に住むママ (30代くらい、子ども2人)	・金町にある幼稚園に子どもを通わせるママ。 ・ほかの幼稚園のママと話をするが、地域の人あまりいない。普段はアリオ亀有(※1)に行くことが多い。
9/26	A児童館	普段S児童館を利用するママ (30代くらい、子ども2人)	・昔(年上の兄弟児あり)のころは、A児童館の利用も30~40組ほど利用者がいた。よく、そこで園の口コミや入園準備について情報共有をしていたが、コロナ明けから利用者は依然と比べると減った。今はママ友を作る場所もなく、たまたま会った利用者の方に「 <u>みんなどこで遊んでいるんだろう</u> 」と話をしていた。
10/2	こども園そあ	水元地区在住のママ(20代、子ども1人、2歳児)	・ <u>水元スポーツセンター公園の乳児用アスレチックでよく遊ぶ。でも、いつも3組くらいしかいない。夏場は誰もいなかった。</u>
10/11	新宿みらい公園	水元地区在住のママと祖母 (子ども2人)	・4月から上のお子さんが近隣の幼稚園に通っている。みさと公園もよく利用する。水元地区にある近所の公園が主な遊び場。室内だとよくアリオ亀有(※1)に行く。 ・親子が少ないとはあまり感じていない
11/22	新宿みらい公園	ママ2人 (それぞれ子ども1人、1歳児)	・家が近いため、よく新宿みらい公園を利用する。新宿みらい公園には0~2歳児の乳児さんが多いような気がする。
12/6	水元スポーツセンター公園	公園近辺に住む親子(子ども1人)	・B保育園の子育て広場をよく利用する。その広場は職員が良いことと、施設が広いいためよく利用している。

※1 アリオ亀有とは、東京都葛飾区亀有にある複数商業施設のこと。

③ 公園保育（講座名：とことこ水元）で地域の集いの場づくり

<成果・評価>

「とことこ水元」は、調査で親子連れが多いと判明した水元周辺の公園を活動拠点として 11 月から開始した。上の表の波線のように、公園に地域の人が集まらない現状がある。そのため、とことこ水元では活動場所を固定せず、調査をして地域の人がいるとわかった公園を巡回し、地域住民を探しつつ、遊びを提供するスタイルを取り入れた。その際、地域住民に現在地や当日の遊びの内容を、Instagram を使いリアルタイムで発信した。親子と職員で遊んでいると、ほかの子どもがその様子を面白そうとに見に来る。このように公園の一角に、親子が自然と集う場が形成された。こういった講座に親子がスムーズに参加できるよう、子育て広場の公式 LINE を作成した。これにより、アンケートへの記入、イベント情報の確認、予約手続きをすべて LINE 上で完結できるようになり、登録者も増加している。これらの取り組みの結果、公園で多くの親と知り合えたことで、悩みや相談がある方は、栄養士や看護師などの専門家に繋がったり、生き物が好きな子には自然遊びの活動を紹介したりして、とことこ水元は必要に応じて、窓口の役割を行える講座になった。

結果として 10 月～12 月の期間に今年度最大人数である 147 名もの親子が子育て広場を利用でき、「とことこ水元」のスタイル、リアルタイムな情報発信、そして利便性の高い公式 LINE アカウントの活用を説いたことが今の地域の人にもうまくマッチできたといえる。

④ 広場図書館

職員が絵本を登録する様子



広場図書館の全体



広場図書館を利用する親子



<成果・評価>

こども園にはたくさんの絵本があるため、それらを複数台のパソコンから取り込み登録することで、貸出絵本の本数を大幅に増やすことができ、季節の絵本や乳児向けの絵本などを増やすことができた。とことこ水元で出会った親子が、園に遊びに来てくれることも増えてきており、広場図書館のことも知ってもらう機会が少しずつ増えた。広場図書館を見て「園に来れば、だれでも利用できるんだ」と利用者登録をする方も増えてきている。しかし現状、公園などで出会った親子は、特に、園に遊びにふらりと絵本だけ借りに来るまでのハードルは高く、定期的に地域住民が絵本を借りに来るという段階には至っていない。現在、乳幼児向けの絵本を中心として貸し出しを行っているが、今後はサービスを周知させるために地域の人が目にする場所にポスターなどを掲示し、地域住民に知らせることと、絵本の種類を乳幼児向けだけでなく、学齢期の子ども向けの絵本や保護者が読んで、ホッとできるような書籍や雑誌なども用意したりし、改変していきたい。

4. 今後の課題と展望

私たちが行っている子育て広場で実施している講座に関する情報は、現在行っているチラシの配布や SNS 等での発信で、地域住民に十分に伝わっていないと実感することがある。現状からは地域に住む本当に支援が必要な親子のもとに届いているのかと言ったら、まだ見えてこない部分が課題として残っている。そういった方への支援をふまえて、保育事業に関するさまざまなことをもっと地域に伝え、広げる必要があると考え、今後は他の園の子育て広場や自治体、企業などと連携し、水元に住む親子への地域支援の輪を広げていく活動を行っていきたいと考えている。そのために、現在葛飾区にある複数の子育て広場と合同連絡会を実施する計画を立て、来年度から実施ができるよう他園への呼びかけを始めている。その合同連絡会の中で自分たちの地域の情報交換を行い、そこから地域支援活動としてできることはあるかを検討し、地域に対して園と園とが繋がっていくことで、本当に支援が必要な世帯に届く大きな支援の輪を作っていけるようにしたい。

以上